［課題］

第 2 回課題（1500 字以上）
パーソナリティの記述において，類型論と特性論の違いについて説明しなさい。またパーソナリティ測定の方法として，質問紙法を用いる方法と投影法を用いる方法について，それぞれの特徴を述べなさい。

［本文］

心理学では性格や人格が先天的なものと後天的なものに分類する。キャラクターは生まれつき，または遺伝的に受け継いだ性格を指す。一方，パーソナリティはもともと仮面を意味する語であり，社会的役割や外見的な自分という意味が含まれ，成長過程において外部からの刺激を受け完成した後天的な性格を指す。後天的なものならば，環境や行動によって変えることができるので，精神分析や人格検査による治療の適用範囲となっている。[1]

類型論とは，一定の観点から典型的な人格像を設定し，それによって多様な人格を分類し，人格の理解を容易にしようとするものである。類型論的な構想は古くからあり，古代ギリシャのヒポクラテスの四体液説，ガレノスの四気質説などが挙げられるが，実証的な裏付けはない。[2]

ドイツの精神学者クレッチマーは精神病と体型との間に関連があることを認め，それを一般の人にも適用した。約 8,000 名の患者の体型を調べた結果，肥満型は温厚で社交的だが，陽気と陰気が交互に見られ，気分にムラがある躁鬱気質。痩せ型は控えめで真面目だが傷つきやすく，非社交的なところがあり，統合失調気質が見られる。筋肉質型は几帳面で忍耐強い、熱中しやすく，他人の意見を聞かないところがある粘着気質と，３つの類型に分類した。

アメリカの精神学者で医学者のシェルドンは，クレッチマーの類型論が精神病患者の観察に基づいており，観念的過ぎると批判した。そして，正常な 4,000 人の体型と気質のデータを集め，胎児期の細胞のどの部位が発達しているかによって，人間の気質を３種に分類した。内胚葉型は温和でのんびり屋、社交的だが気分にムラがあり，クレッチマーの肥満型に相当する。外胚葉型は，感受性が豊かだが身体が弱く，人付き合いが苦手なところもあり，クレッチマーの痩せ型に相当する。中胚葉型は，身体も自己主張も強く，活動的だが強引な面を持ち，クレッチマーの筋肉質型に相当する。[3]

ドイツの哲学者，教育学者であるシュプランガーは，人の基本的な生活領域を６つ（理論型・経済型・審美型・宗教型・権力型・社会型）に分け，これらの領域の重点の置き方による類型を考えた。ただし，価値観と職業によって規定される点が多いなど批判されている。[4]

スイスの精神医学者で分析心理学の創始者であるユングは，リビドー（心のエネルギー）が向かう方向によって，人間の気質を「内向型」「外向型」に分けた。さらに心の機能に注目し，思考型，感情型，感覚型，直感型に分類し，これらを組み合わせ，人間の性格には８種のタイプがあるとした。外向型はリビドーが現実に向かうため，社交的で陽気，他人の意見にながされやすくなる。一方，内向型は心のリビドーが自分の内面に向かうため，自分の殻に閉じこもりがちに

なり，他人の意見を聞きいれない傾向が強くなる。そして、思考型は考えることが得意で，物事を論理的に捉える。感情型は喜怒哀楽が激しく，物事を好き嫌いで判断する。感覚型は五感が鋭く，物事を触感や嗅覚でとらえる。直感型はひらめきを重視し，思い付きやインスピレーションで行動する。ユングは”内向的・外交的×４種の機能”の８種の組み合わせ理論を心理療法に応用した。[5]

特性論とは，人格をいくつかの要素から成り立っているものと考え，その要素の量的な差異を測定することで人格を理解しようとする立場である。

アメリカの心理学者であるオルポートは，辞書の中から，性格を表している言葉約 18,000 語を抜き出し，その中から約 4,000 語を個人が環境に適応する因子として分類した。

イギリスの心理学者キャッテルは，人格を外部から直接観察できる表面特性と，それを決定する深い層にある根源特性に分け，16 の根源特性にまとめた。

行動療法の推進者であるアイゼンクは，神経系の機能の個人差が人間の社会化の過程にも影響すると考え，行動の組織を類型，特性，習慣的反応，特殊反応の４つのレベルに分類した。[6]

上記のように，人間の人格を表現する人格特性の数や種類は，研究者によって異なっている。しかし，近年では，様々な研究者やデータに基づく因子分析によって，共通の５因子（誠実性，外向性，協調性，開放性，情緒安定性）の組み合わせで表される「ビッグファイブ理論」が主流となっている。[7]

人格を測定する科学的な道具として開発されたのが人格検査である。人格検査は心理検査としての妥当性と信頼性，検査の標準化を満たしていることが前提となる。

質問紙法は，ある人格の特徴についてあらかじめ適切な質問項目群を設定し，それに対する回答によって人格を捉える方法である。実施や採点が容易で，結果の解釈も客観的であり，いつ誰が実施しても同じ結果が得られるので，比較的頻繁に用いられる。

代表的な質問紙法として，矢田部・ギルフォード性格検査，ミネソタ多面式人格目録検査，モーズレイ性格検査，カリフォルニア人格検査など多くの検査がある。[8]

一方，投影法は，曖昧な絵や図形，文章などの刺激に対する自由な反応から，人格を捉えようとするものである。曖昧な刺激の解釈には，自分の経験や知識，その時の欲求や感情が投影されることを利用している。この方法では回答者は作為的な反応できなくなる。また，回答者が意識していない欲求や感情も投影されるので，人間性のより深いところを捉えることが可能である。しかし，投影法の実施や採点には，高度な専門的知識やトレーニングが必要とされ，誰にでもできるものではない。

代表的な投影法として，ロールシャッハテスト，バウムテスト，主題統覚検査，P-F スタディなどの検査がある。[9]

文字数 2396 字

＜引用・参考文献＞

---

[1] 横田正夫監修『教養のトリセツ　心理学』日本文芸社，2016，pp.104 参考.
[2] 西野泰広『こころの科学』東洋経済新報社，2003，pp.111-112 参考.
[3] 横田正夫前掲書，pp.106-107 参考.
[4] 西野泰広前掲書，pp.114 参考.
[5] 横田正夫前掲書，pp.108-109 参考.
[6] 同上，pp.116-119 参考.
[7] 横田正夫前掲書，pp.111 参考.
[8] 西野泰広前掲書，pp.123 参考.
[9] 同上，pp.123-124 参考.